

# NPO法人 自然と緑

特定非営利活動法人 自然と緑  
 代表者 伊藤 孝美  
 〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-18  
 大阪市教育会館 5 階  
 TEL : :06-6809-1700 FAX : :06-6809-2702  
 E-mail : [info-sm@shizen-midori.org](mailto:info-sm@shizen-midori.org)  
 URL : <https://shizen-midori.org>

NPO 法人自然と緑会報 2026 年 7 月 1 日発行 第 149 号



## 第 28 回通常総会議事録（抄録）

議事録作成者 諸富真澄理事 八尾佳典理事



1. 日 時 2026 年 6 月 6 日（土）14 時から 16 時 55 分まで
2. 開催場所 大阪市中央区法円坂 1-1-38 大阪市教育会館東館 407 号室
3. 議長等の選任
  - ・定刻に至り、司会者瀧原事務局長は、本日通常総会に定款による定足数を満たしたので有効に成立する旨を告げ、議長に神崎トモ子理事を全員の承認で選任し、第 28 回通常総会の開催を宣言した。
  - ・伊藤孝美理事長が欠席の為、上田豪筆頭副理事長が伊藤孝美理事長の挨拶文を代読し、来賓の大阪交通労働組合書記長西川真也氏、自然大学学長の渡辺弘之氏を紹介し、挨拶を頂いた。
  - ・議長は議事録署名人に小島和江理事、松田純一会員を選出し全員の承諾により選任された。議事運営・資格審査委員に高田七重理事を指名したところ全員意義なく承認された。
  - ・議長は高田七重議事運営・資格審査委員から現在の正会員数 199 名、出席会員は 33 名、委任状 87 名、計 120 名により過半数との報告を受け、14 時 20 分総会は無効に成立している旨を告げ議事に入った。
  - ・議事に入る前に橋木文雄会員の提案により先般亡くなられた多和小彌太会員に対して 1 分間の黙とうを捧げた。
4. 議事
  - ・【第一号議案 2025 年度 事業報告】について上田豪筆頭副理事長が、【第二号議案 2025 年度 活動計算書報告】について本田良一理事が、【同、監査報告】について佐々木泰彦監事が報告を行った。



### — 149 号目次 —

p 1～p 3	第 28 回通常総会議事録（抄録）	第 28 回通常総会書記
p 4	新理事紹介	新任理事
p 4	寄付等の御礼	自然と緑会報編集部
p 5～p 6	渡辺弘之の未解決事件簿（31） シマリスがインド南部にいた？	自然大学学長 渡辺弘之
p 7	さいとうさんの“話のタネ”（76） 亜阿相界・奇想天外	前自然と緑理事長 齊藤侑三
p 8～p 9	第 30 期自然大学 琵琶湖実習感想文（抜粋）	第 30 期自然大学受講生
p 9～p 10	私が見た植物の不思議（4） イスノキ編	自然と緑理事 関澤友規子
p 10	活動報告／編集雑記	自然と緑会報編集部
p 11～p 12	自然大学 30 周年記念シンポジウムのお知らせ	自然大学 30 周年記念実行（委）

修正【第一号議案 2025年度 事業報告】P4- 2行目 父兄→保護者に訂正  
修正【第一号議案 2025年度 事業報告】P4- 斑鳩町の里山整備 活動の振り返り 5行目 86名→75名に訂正

修正【第一号議案 2025年度 事業報告】P9- 第27回通常総会 主な審議項目欄 第一・第二号議案2023年度→2024年度 第三・第四号議案2024年度→2025年度に訂正

本田理事より【第二号議案 2025年度 活動計算書報告】について、長い1枚目しか報告しなかったが、2枚目以降短い計算書も添付していると謝罪

【質問】(城ノ下夫三枝会員) P7-の協力事業 NTT、箕面国有林に活動要請がなかった理由を知りたい。

【答弁】(瀧原勇事務局長) 数年前まではNTT等、一緒に間伐を行っていたが、企業の方針が変わったという事で活動中止の連絡を受けた。NTT ドコモの近江奥島の森、及び箕面国有林については要請があるかも知れず、待ちの状態。

【質問】(城ノ下夫三枝会員) 話はされているのか。

【答弁】(瀧原勇事務局長) 対話は行っている。

【意見】(城ノ下夫三枝会員) 昨今、企業は社会的責任を感じている。緊密に連絡を取って活動に繋げる必要があるのではないか。

【答弁】(瀧原勇事務局長) 検討します。

【質問】(橋木啓子会員) P8-の広報活動 やまびこはメール配信と郵送を含めて4割という意味で良いか。ホームページで確認する人が6割？

【答弁】(関澤友規子理事) 議案書の書き方が分かりにくく申し訳ない。メール配信4割、郵送4割、ホームページ2割となっている。

【意見】(上田豪筆頭副理事長) P10-の理事会 出席状況欄、傍聴者が8、10、11月と1名ずつのみとなっている。本理事会は公開形式となっているので是非出席してほしい。

**第一号議案、第二号議案 賛成多数の挙手によって承認された。**

休憩15時15分から15時25分

・【第三号議案 2026年度 事業計画】について牧野道夫副理事長が、【第四号議案 2026年度 活動予算書(案)】について本田良一理事が提案を行った。

詳細説明【第三号議案 2026年度 事業計画】P12- 自然大学は今年度の受講生40名であり、リーダーの負担が大きいと感じられる。芦生での一泊研修はなくなったが、9月にオプションとして企画している。また、10月には上賀茂試験地での実習を予定している。

【質問】(山川亮二会員) 牧野副理事長より過去4年分の会員数のデータを頂いている。2026年度会員数見込みは182名、2022年度の会員数は210名であり、ここ数年で14%の減少が見られるが会員減の要因をどう分析されているか。また、対策を考えているか。

【答弁】(山下明美理事) 自然現象だと考えている。2025年度は自然大学受講生が少なく、会員数も減少している。2026年度は受講生が多い。結果、会員数が増えると予想している。自然大学受講生を増やしたい。高齢化に伴う減少もあると思っている。

【意見】(山川亮二会員) SNSでの発信でも自然大学の募集はしていない。受講生の内、何人が会員になったかデータを集めてそれに基づいた議論も必要ではないか。

【答弁】(瀧原勇事務局長) 未だ案は出ていないものの、企画グループで会員増計画はある。自然大学受講生が多いと会員は増えている。自然大学受講生を増やす事が必要だと考えている。

【意見】(山川亮二会員) 会員を増やす為自然大学以外の方法も考えなければいけない。昨今、新聞を読まない人も多いので頼りにするのは遅い。SNS等のメディアの活用も検討すべきである。

【意見】(川崎功会員) 私は東京にある他の自然保護団体にも所属している。そのNPOでもホームページから企業との協業を行っている。ホームページを改善して協業先を探すなどの企画をすべきだと考える。

【質問】(橋木啓子会員) 収入と支出に繰入金をしなくてすむ理由が分からない。どこを節約したのか。シンポジウムの寄付など、カンパを募るという事か。

【答弁】(本田良一理事) 予算規模としては昨年と変わらず、600万程度である。自然大学の受講生が増えることで受講費が増えたがそれはほかのところに補填しているので総額は変更がない。

【質問】(橋木啓子会員) 事務所家賃が高額だという問題提起を昨年行ったが、これは検討したのか、全くしなかったのか。

【答弁】(瀧原勇事務局長) 昨年提案頂いたまま検討していない。中道の事務所から教育会館移転時に近辺の家賃と比べて7~8割程度と安く、会議室も必要だった為。

- 【意見】(橋木啓子会員) この場所にこだわる必要はないのではないか。会員に情報をもってはどうか。年間 100 万円の家賃を減らせる検討をしていないのではないか。
- 【意見】(城ノ下夫三枝会員) コピー機レンタルを延長して単価が高くなったという説明があったが、私が活動している所では買い取りをしている。他にも情報を求めるべきではないか。コピー機の事であれば私も説明出来る。
- 【質問】(真鍋全理事) 森林環境税は斑鳩町の整備に使われているのか。
- 【答弁】(牧野道夫副理事長) 税は地方自治体に配られている。高齢化等により人出が足りないので活用が進んでいないと思われる。
- 【質問】(真鍋全理事) ホームページの閲覧数は分かるようになっているのか。
- 【答弁】(神崎トモ子議長) 今後の検討とします。
- 【意見】(大東弘会員) 森林環境税は岡山から始まった。都道府県で集めた税金を市町村が地元で保全活動したものに活用する。ほったらかしの里山を整備した場合に配られる。しかし、都道府県が集めても市町村が受け入れない。地主が嫌がる為、主体は都道府県だが使えない。
- 【意見】(山川亮二会員) 自然大学 4 年分で会員減少を見てきた。今後の高齢化はあたりまえ。高齢化を言い訳にはいけない。
- 【意見】(大谷公子理事) 高齢化に伴い、働く年齢も高くなっている。その人達をどう取り込むかが問題だと考える。
- 【意見】(牧野道夫副理事長) 今年度、大阪交通労働組合の中から 5 名若い人達が入っている。会社等の母体がしっかりしないと個人の力で働いている人が入るのは難しい。そのような母体を持っている方を中心に開発したいと考えている。

**第三号議案、第四号議案 賛成多数の挙手により承認された。**

- ・【第五号議案 役員改選】について小島和江事務局次長が提案を行った。
  - 6名の理事退任 上田豪、高田七重、本田良一、田名原マサ子(欠席)、大谷公子、諸富真澄。
  - 2名の監事退任 佐々木泰彦、矢野ヒロミ。
  - 2名の理事新任 川崎功、小池禎。
  - 2名の監事新任 大東弘、高田七重。

**第五号議案は全員の挙手をもって承認された。**

新任理事、監事挨拶 退任理事、監事挨拶  
 議長の神崎トモ子理事は以上を持って議長の任務を解かれた。  
 瀧原勇事務局長より前理事長 齊藤兎三氏を NPO 自然と緑の名誉会員とする報告があり、上田豪筆頭副理事長より前理事長 齊藤兎三氏に賞状を進呈した。  
 前自然大学学長の故只木良也氏も名誉会員候補であった旨、説明された。  
 瀧原勇事務局長は閉会の挨拶をし、16 時 55 分、第 28 回通常総会は閉会した。



名誉会員証授与

以上

## 自然大学 30 周年記念

### シンポジウム

☆日時:2026 年 7 月 5 日(日)

13 時 30 分~16 時 30 分 (13 時受付)

☆会場:大阪市 東成区民センター

(コミ協ひがしなり区民センター)

詳細は、11~12ページを  
 ご覧ください。

—ホームページをご活用下さい—

この QR コードをスマホで読み取ると「NPO 法人自然と緑」のホームページがご覧いただけます。最新の活動の様子も写真で紹介しています。



新理事紹介 第28回通常総会で選出された理事の自己紹介です。

## 2年間でやりきる覚悟を持って！

川崎 功

皆様、こんにちは。第27期自然大学からお世話になっている川崎と申します。今般、自然と緑の理事に就任させて頂くこととなりました。

私は昭和38年に大阪市内で生を受けて、大阪以外では東京方面とフランクフルトにしか暮らしたことのない都会育ち人間で、仕事も重金属を含む金属処理剤の開発等であり、自然等とは縁のない半生を過ごしてきました。そんな私は、自然大学で全く違う世界に触れ、また多くの新たな仲間が

出来て人生に彩が出てきたことに、心より感謝しています。

今回理事を受けるに当たり正直、私の中で少し葛藤がありました。その理由には、私は全国を渡り歩いて多くの方々の力になりたいという夢を持っていることがあります。その一方で自然と緑の運営に携わり、何とかして持続可能な組織にしたいとの思いもありました。そこで悩む私に降りてきたのが、”理事の期間2年間は、様々な困難を乗り越えて改革をやりきる”という覚悟でした。

今回この紙面を借りて私は宣言します。2年間は不動明王のように動きます。そしてその後は、優しいかぐや姫に戻って月に帰っていくかも…。少し変わった就任挨拶ですが、この2年間どうぞよろしくお願い致します。



## デザインってなんだろう？

小池 禎

デザインという言葉が日本に入ってきた時に、それを当時“意匠”と訳してしまったが故に日本ではデザインは色やカタチの意味に捉えられがちになってしまいました。デザインという言葉の起源はフランスに始まり、その意味は企画する行為全般を指します。最近ではデザイン思考という言葉がアメリカで生まれ、その意味は問題解決の手法、プロセスを意味します。

小池は大学でデザインを学び、自動車のデザインに24年間携わり、その後、医療、健康事業のデザインをしてきました。

現在は里山に拠点を移し、自然の中での暮らしを通してライフワークとしてのデザインに取り組んでいるつもりです。

そうした中で、自然大学に出会い、森林の整備事業も含め、それらの活動に興味を抱きました。今回、理事に仲間入りさせて頂くことになりましたが、僕にできることはあくまでデザインという視点で事業全般のありたい姿に近づけるよう少しでも貢献できればと思っています。



### 【寄付等の御礼】

いつもありがとうございます

<切手、ハガキ、現金など>

寄付 西村 明子 様  
寄付 大東 弘 様  
切手 森島 幸子 様  
葉書 森島 幸子 様

ご寄付は下記までお願いします

ゆうちょ銀行口座名：  
特定非営利活動法人 自然と緑

口座記号： 00900-7

口座番号： 150942

振込用紙の通信欄に「寄付」と明記願います。



## 渡辺弘之の未解決事件簿 (31) シマリスがインド南部にいた？

自然大学学長 渡辺 弘之

### 赤道をまたぐ

アフリカは南半球にある大きな大陸と思われている方が多い。地図を開いてみればわかるが、赤道は東海岸のケニアから西はガボンを通る。アフリカ大陸は北半分、北半球にある部分の方が大きいことがわかる。ケニアのナイロビにある国際アグロフォレスト研究センター (WAC・IOCRAF) の理事を務めているとき、初めて参加した理事会のエクスカージョンで、コンゴ、ウガンダとの国境にもなるビクトリア湖へ案内された。ここがエジプト地中海へ注ぐナイル川の最源流である。飛行機はナイロビからビクトリア湖に近いクスマまで飛んだ。ビクトリア湖近くで、運転手が「今から面白いことが始まります」といった。何のことかと思っていたら、小さなゲートをくぐった。「今、北半球へ入った」という。アフリカは北半球の国だということを改めて認識した。車を止めてもらい写真を撮った。

赤道はもう一ヶ所でも通ったことがある。ボルネオ島、インドネシア領西カリマンタン州の州都ポンティアナックは市の中心部を赤道が通っている。中心街の道路の上に大きなゲートが造られており、フタバガキ科樹種から採れるテンカワン (イリッペナツ) と籐 (ラワン) の調査で滞在した時は毎日北半球から南半球へ、南半球から北半球へ移動した。大きな都市で赤道が通っているのは、南米エクアドルのキトくらいらしい。キトへは行ったことがないが、ケニアのクスマと西カリマンタンのポンティアナックでの赤道通過は思い出深いものである。

シンガポールへ行ってもまだ赤道を越えていない。インドネシアのジャカルタやバリ島へ行くと赤道を越える。座席のモニターをみて、調査に同行の学生に「まもなく赤道を越える。地表に赤い線が見えるはずだ、写真撮っておいて」といったら、真剣に窓の外をみていたが、「雲が多くて見えません」と応えた。私の冗談に応えたのかと思ったが、本気で探したようにも見えた。撮れたら欲しい写真だった

大阪から磁石を頼りに、ひたすら西へ、西へ進むとどこへ到達するだろう。中国からヒマラヤ山脈の北チベット高原、アフガニスタン、イラン、イスラエルを通過して地中海へ、そして、アフリカ大陸の北端チュニジア、モロッコに到着する。大阪とモロッコは北緯の同緯度だ。アフリカ大陸の大部分が北半球にあることがわかるだろう。

### インド南部にシマリスがいた

インド南部バンガロールへ行ったのは1988年8月のこと、国際土壌動物学会へ参加した時のことだ。インドは大きく広い。バンガロールは逆三角形のインドの突き出た先端部、東海岸のマドラスと同緯度の内陸部にある学術研究都市、現在はIT産業で有名などころ、緯度は北緯10°くらいである。東南アジアの大都市ではどこでも街路樹や屋敷地内のココヤシに簡単にリスを見つけることが出来る。大きいもの小さいもの何種かいるが、少しもじっとしていないでせわしく動く。それだけに見つけやすいのだが、写真を撮るのは簡単ではない。熱帯と思っていたバンガロールのインド農業大学のキャンパス内でも町中の公園でも、活発に動き回っているリスがいた。それがシマリスだったのである。



インドにシマリス??

シマリスは日本では北海道にだけいるものだ。和名の通り縦の縞模様がきれいな可愛い動物だ。私自身、北海道へは何度も行っており、夏休みのアルバイトで2度も帯広営林局管内の営林署で山林作業をしており、十勝岳にも一人で裏から登ったくらいだから、シマリスには何度も会っている。一時、シマリスを飼うのがはやった。保護獣で捕獲することが禁止されているのに、何故飼えるのかと思ったが、ペットショップで販売されていたのは韓国産か中国産のチョウセンシマリスであった。

調べてみると、日本のシマリスもロシア、モンゴル、カザフスタン、中国東北部などアジア大陸北部に広く分布するシベリアシマリスの北海道産の亜種でエゾシマリス (*Tamias sibiricus lineatus*) と呼ぶのが適当らしい。寒冷地に適応し、冬は冬眠することが知られている。しかし、インド南部まで分布するとはどこにも書いていない。

シマリスの動きは敏捷だ。飼育籠の戸を開けたとたん、あっという間に逃げ出す。いわゆる「籠脱け」である。逃げ出したシマリスが湘南地方でのタイワンリスのように増殖するのではないかと心配していたら、すでに北海道、新潟、山梨、長野、滋賀県などで定着しているらしい。北海道では日本産のシマリスとの交

雑が心配されている。

まちがいなくインド南部のバンガロールにシマリスがいたのである。ヒマラヤ山脈山麓ならいてもいいだろうが、熱帯域のバンガロールである。こんなところにもシマリス生息することを研究者は知らないということだろうか。私だけが見た幻かと思ったが、ちゃんと証拠の写真も撮ってある。ネットでインドを旅行された方の旅行記の中にデリー、タジマハール、アグラでシマリスを見たとあった。1992年8月、私もここへ行ったが、民家の屋根の上にクジャクがいるのを見たが、シマリスは見なかった。自然大学修了生で現在インド、ニューデリーの日本人学校の校長をされている小田恵美子さんに聞いたら、ごく普通にいますよとのことだった。まちがいなく、シマリスはインドに広く分布するようだ。

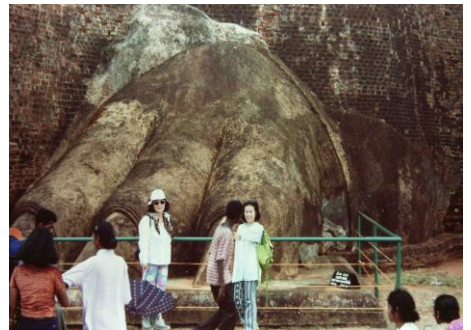
### インドライオンも見る

1988年バンガロールから少し南のマイソール州の国立公園へ案内された。ここにインドライオンがいた。日本では子供たちにライオンはどこにいるかと聞けば、「アフリカ」と答え、「アフリカとインド」と答える子供はまあいないだろう。古くは南西アジアからイラン、インド辺りまでいたが、現在はインド北西部のギル保護区のみで、アフリカライオンが草原性なのにインドライオンは森林性だという、やや小型で体毛が薄い感じがした。私が見たものも、あるいは生息地から連れてこられたものだったのかも知れない。ともかく、この眼でインドライオンを見たのである。

スリランカの旧名セイロンは初代王族がライオンと人間の間に生まれたとされ、セイロンはライオンの島を意味するという。スリランカの国旗はライオンが剣をもっている。さすがに、スリランカにはライオンはいなかったであろうが、インドにはいた。その強さを知っていたということだろう。スリランカでの必見の観光地、世界遺産にも指定されているシギリヤロックは巨大な岩の上に築かれた城塞宮殿だが、その登山口に一对の石造りの大きなライオンの前肢があった。スリランカのビールに「Lion」というのがあり、人気だ。



インドライオン



シギリヤロックのライオン像の前肢



スリランカのビール「Lion」

タイのビールにビア・シン、シンハ・ビアー (Singha beer) というのがある、ラベルにライオンが描かれている。シン (Singha) はサンスクリット語でライオンのこと、仏教では力の象徴である。シンガポールもシンハ (ライオン)・プラ (街) という意味であり、有名なマー・ライオンがある。カンボジアのアンコールワットにもライオン像があった。こんな東南アジアまではライオンはいなかったが、仏教やヒンドゥ教の威厳・力の象徴としてあがめられていたのである。

シマリスでなくジャングルヤシリスだった

インド南部でみたシマリスが気になって Mammals of India で調べたら、シマリスはまちがい、ジャングルヤシリス (ジャングルシマリス・ヤブシマリス・インドヤシリス Jungle palm squirrel) (*Funambulus tristriatus* か *F. palmarum*) というインド固有のリスで、シマリス同様3本のよく目立つ縞模様がある。一見、北海道のシマリスとよく似ている。誰が見てもシマリスというだろうが、シマリスとは別の属なので形態的にも明瞭なちがいがあるのだろう。シマリス同様、可愛いけものだけに、モーリシャスなどに移殖されているそう。シマリスがインドにいること研究者も知らないのかと思ったのだが、これは私の知識不足、シマリスとよく似た熱帯性のジャングルヤシリスだった。研究者は当然、知っていた。私が知らなかったということだ。私の未解決事件は一件落着となった。

スリランカにはこれまで2回、2000年8月と2001年5月に行ったことがあるが、内戦下で人の集まる観光地や市場には行けなかった。2026年3月久しぶりに行って、観光地や国立公園などを回った。シギリヤロック周辺やペラデーニヤ植物園内にもヤシリスがたくさんいた。インドのものと同種かも知れない。ヤシリスがスリランカにも広く分布することがわかった。

## さいとうさんの「話のタネ」(76) 亜阿相界・奇想天外

自然と緑名誉会員 齊藤 侑三 (前自然と緑理事長)

平成2年(1990)花博が開かれた鶴見緑地に「咲くやこの花館」が残されている。乾燥地植物室に日本では生育していない変わった植物がたくさんある。

外国から入ってきた植物の名前は学名のままで呼ばれていることが多い。しかし、和名が変わった名で「アアソウカイ」「キソウテンガイ」という植物がある。漢字で書くと“亜阿相界”と“奇想天外”だ。誰がこんな名前を付けたのだろうか。そして権威ある学会がこの名を認めたのだろうかと思った。



アアソウカイ



キソウテンガイ



キソウテンガイ雌花

“**亜阿相界**”は、原産地のマダガスカルはアジア(亜細亜)とアフリカ(アフリカ)の境界に由来(京都植物園の名札説明より)アアソウカイはサボテンの栽培研究で国際的に名を知られた小説家の龍胆寺 雄の命名だ。亜阿相界はマダガスカル特産の植物に全部当てはまるが、同じ名前は付けられない。この植物がこの名を貰ったのは「相当な変わり者だった」からか。

“**奇想天外**”は、非常に変わった植物という意味で1936年(昭和11年)園芸商人の石田兼大が名付けたといわれる。この名前を学会が認めたのは他にこの名以上の良い名前が思いつかなかったからだろうか。

【**アアソウカイ**】(キョウチクトウ科) マダガスカル南西部の乾燥地域が原産。高さ8mを超える木になり、頂部に長さ30cm、幅2cmの葉がつく。葉の基部に3~4cmの針状の刺が3個付ける。落葉しても刺は残るので、幹全体が刺で覆われている。幹の内部はスポンジ状で、水分を貯められる構造になっている。花は直径3cm程度で白色。

【**キソウテンガイ**】(ウエルウィッチア科)1859

年オーストリアの探検家ヴェルヴィッチュが砂漠で発見したのでこの科名がついた。雌雄異株の裸子植物。一生でたった2枚の葉しか付けずに2000年以上も生きるとされる。葉は2-4mで自生地では長さ8mになるものもあるという。2枚の葉は利尻島の海岸に干してあった昆布に似ている。分裂組織は葉の基部にあり葉先から枯れていく。年間降水量が25mm程度だから大気中の湿気を吸収し、蒸散することで葉を冷却し灼熱の暑さをしのいでいる。水の少ない乾燥地に生育する植物は乾燥に耐えるために独特な形に進化している。1995年夏、京都府立植物園で雌株は松笠のような球果をつけていた。写真の雌花は咲くやこの花館に保管してあったものだ。

※種子が発芽してから種子をつけるまでに、25年ほどかかる。寿命は長いが、成長は遅い。

花は、日本では雄株の場合数年~10年、雌株の場合10年~20年程度で咲くようになる。寿命は1500年の個体も存在する。日本の歴史でいえば継体天皇の頃から生き続けていることになる。この2種は「奇想天外」の名で「ああそうかい」と納得しそうな命名だ。



アアソウカイ



アアソウカイ



キソウテンガイ雄花

## 《 1 班 》

○琵琶湖は温帯湖であることから水温変化による全層循環が数百万年以來成り立っています。近年の温暖化により急激に循環が弱体化しているとのこと。琵琶湖は地理的に三方を山に囲まれているので、滋賀県に降った雨は全て流れ込むことにより、冬から春にかけて冷たい風と雪解け水で水温が下がり、全層循環が成立しているとのことでしたので、少し安心しました。人工的な水質保全対策の一つとして、貯留池や水生植物により浄化しているのがよいと思いました。在来魚介類が減少しているとのことでしたので、二枚貝は浄化能力が高いようですから、環境適応するかどうかは知らないのですが、固有種のセタシジミやイケチョウガイを貯留池で浄水に利用することはできないものかと思いました。アオコの被害がカビ臭の原因になっていること知りました。そのラン藻類が短経年でカビ臭のする種になったり、しない種になったりとごっそり入れ替わるようです。そんなに一気に変化するものなのかと首をかしげました。プランクトン採集では、強風で波打つ湖面、灰色の空、はるか山並にかかる雨雲、琵琶湖の大きさを肌で感じました。さて、ネットの投げ具合はと言えば、私は最悪でした。しかし、顕微鏡下では大漁で、こんなにたくさん入っているとは思っていませんでした。クルクル、グールグル、ピコピコ、ユラユラ、何とか動画に収めようとしたのですができずに残念でした。顕微鏡を覗き込んでいたいし、大塚先生、鈴木先生の説明もお聞きしたいし、同定もしたいし、忙しくしているうちに時間がきてしまいました。解散後の館内見学で、日本最大のミジンコ「ノロ」の生態展示を見ることができて、とてもラッキーでした。



湖畔の生態系の解説

○琵琶湖の水を採取した時未知の世界を知る嬉しさにワクワクしました。実際、顕微鏡を覗くと無数の小さな生き物が活発に動いており感動しました。象のように鼻が長い、丸い、細長い、エビのよう……など初めて見るプランクトンの世界にゾクゾクしました。もっと知りたい、名前を覚えたい……一見して静かな湖の中に、こんなにも賑やかな世界があるとは想像していませんでした。まるで別世界、私は夢中になり、他の班の顕微鏡も覗いて回りました。それぞれに違うプランクトンが様々な動きをしていました。生き物っていいなあ……と思いました。顕微鏡を覗かないと見ることでできない世界ですが、プランクトンに触れることができてよかったです。「これは新種かもしれない？」と言っておられた琵琶湖博物館学芸員の先生、その後、新種は見つかりましたか？見つかるといいですね！この次には孫と一緒にそちらへ行きたいと思います。この湖の生態系を守るために様々な努力をされている方々に、ご苦労様ですとお礼を言いたいです。そして今“ミクロの世界によるこそ”の本を読んで楽しんでいます。大変面白い授業でした。ありがとうございました。

## — 藻刈舟プランクトンの逃げ惑ひ — 智子

○地元でありながら、身近な琵琶湖のプランクトンのことは殆ど知らないものばかりでした。顕微鏡で見るプランクトンは、どれもかわいくて学芸員の方でなくとも、没入してしまうほどでした。また、琵琶湖総合開発計画以前のことを話されていましたが、自分の子どもの頃には、田んぼに水を入れるために大きな水車の上に乗って、足で回しながら入れていたことを思い出しました。それと、台風などの大雨の時に川が増水し、田んぼ回りの川に鰻が川を埋め尽くすほど遡上していたことなど、学芸員の方に話していました。それも琵琶湖の前は水田の土地が低かったことの表れだったのです。



プランクトン収集網を投げる

## 《 2 班 》

○琵琶湖の環境問題として、合成洗剤の使用やヨシ林が減っていることが挙げられました。それは人間が引き起こした問題ということで、時代の流れには逆らえず人間の生活スタイルは年々変わってきているようです。琵琶湖は何百年も前から変わることがないといいますが、人間の生活スタイルは3~4年でも大きく変わります。生活スタイルを50年前に戻すことはできないのだから、今は今の時代なりの対策が取られるべきであると考えます。顕微鏡の観察では、肉眼では見えない微細な世界の働きを目の当たりにし驚きました。人間の世界にドラマがあるように、微生物の世界にもその世界のドラマがある。プランクトンを見てユニークな美しい姿をしていると感じました。大きさも動く様子もスピードも様々で、新しいスタイルの無声映画のようだと言えなくないです。けれど、あのようなドラマがミクロの世界で繰り広げられていますと言われても、ちょっと信じがたいことではあります。

○以前も琵琶湖の話が何度もありましたが、今回は琵琶湖が主役で、講義はテキストもあり、わかりやすかったです。滋賀県民にとって、琵琶湖の環境は生活そのものであり、県民が一致団結して琵琶湖の環境を守ることを義務のように思っている。このようなことは、他の都道府県ではないように思います。例えば、静岡県富士山は県としては有数の観光地であり、地元の方々は富士山の環境を守ることは大切に思っているだろう。しかし、西側の浜松市辺りは、富士山よりも浜名湖の環境を第一に考えるだろう。実習は楽しかったです。人気あるのもわかる気がします。顕微鏡実習は学生時代以来です。ミジンコなどいろいろ見れました。一番良かったのは、サンプル採取のための網を投げたことです。ストレス解消になった気分でした。



プランクトンの顕微鏡観察

≪3班≫

○琵琶湖博物館は何度か訪れていますが、屋外展示があるのを初めて知りました。縄文・弥生時代を再現した森では、約3000年前の巨大な「スギ」の根株が展示されていて、年輪も確認することができました。今回は、キカラスウリの花やリンゴツバキの果実、ヒシの花などが見られて良かったです。次回訪問した際には、樹冠トレイルもぜひ歩いてみたいものです。プランクトンの顕微鏡観察では、ボルボックスやピワクンショウモがきれいに見えました。ワムシが体を回転させながら泳ぐ様子が、面白かったです。講座の後は、水族展示室に行きました。「淡水魚から見る世界の湖沼」の展示がよかったです。スラウェシ島の古代湖が、メダカの進化のゆりかごだったことが分かりました。また、タンガニカ湖に生息するシクリッドの協同繁殖の話聞いたことがあったので、たっぷり見ることで良かったです。

○琵琶湖博物館での研修会では、湖水を採集し、顕微鏡でプランクトンを観察するという初めての体験をしました。肉眼では見えない微細な生物が、レンズ越しに生き生きと動いている様子に驚きと感動を覚えました。特に印象的だったのは、プランクトンが地球上の酸素の約半分を生み出しているという事実です。小さな存在が地球環境に果たす大きな役割を知り、自然の奥深さとながりの大切さを実感しました。これまで植物や気象に関心を持ってきましたが、水中の世界にも新たな興味が芽生えました。今回の研修は、知識を広げるだけでなく、自然への敬意と探究心を育む貴重な機会となりました。その他、本日の研修、充実し実りが多かったです。400 万年前からの琵琶湖の創造の歴史、京都・大阪・兵庫の命の水。プランクトン・ヒシのこと自宅にて Copilot で真似事の復習です。質問；ヒシは浄化に役立つと……ホテイアオイも同じように浄化に役立つと記憶にあるのですが如何でしょうか？（今日のご説明では浄化云々の解説はありませんでした？）

【説明】ヒシもホテイアオイも緑色植物ですから水中根からN、P等吸収して成長します。しかし、ヒシはともかくホテイアオイは生長が早く、繁茂しますが、そのまま水上に置いておくと腐って、水質を汚すことにつながります。姿形がしっかりしているうちに地上に運び上げて、堆肥化させて農作物に施肥すれば良いのですが……。（伊藤記）

○滋賀県琵琶湖保全再生課主事のお話、わかりやすい資料でした。琵琶湖は様々な価値を持つ国民的資産、マザーレイクゴールズ (MLGs) の推進等を知ることができました。外に出て伊藤理事長の博物館周辺および湖畔の生態観察で 200 万年前ぐらい森林の形態が針葉樹林から照葉樹林へ移行を想像できました。午後からのプランクトン採取と観察は、講師の学芸員指導で楽しい時間でした。以上



## 私が見た植物の不思議（4） イスノキ編

自然と緑理事 関澤友規子

4月下旬、イスノキの花を見ました。赤い不思議な花で花弁もなく①、上に柱頭、下に沢山の雄蕊の花ですが、じつに美しくインパクトがありました。この木に毎年「ヒモワタカイガラムシ」②が付くので、それを探してたら、上の方に赤いものが？と気づいた次第。イスノキは別名「ヒョンノキ」。大きめの虫こぶ③が「笛」みたいで、うまく吹けば「ひよ〜♪」って音がする。秋になって虫こぶに穴が開き、そこから成虫が出たからですが。虫こぶは「植物名+虫こぶの出来る部位名+その形状+フシ」で命名なので、③は「イスノキエダチャイロオオタマフシ」かと。葉にも出来るタマフシ他、イスノキに出来る虫こぶの種類と多さにも驚きますが、カイガラムシまで養うとは何と懐の深い木でしょうか。因みに恐々、若い虫こぶを割ってみました④ 見事にアブラムシの幼虫達でモロモロしていました⑤ 念の為にイスノキの実⑥もどうぞ。これがないと次年度以降困りますね。材は硬くて色々な用途に、また材を燃やした「灰」は有田焼等の釉薬にも、のようで本当に多彩な木です。



NPO 法人自然と緑  
自然大学 30 周年記念シンポジウム



日時：2026 年 7 月 5 日（日）13 時 30 分～16 時 30 分 \*13 時受付

会場：大阪市 東成区民センター（コミ協ひがしなり区民センター）

（アクセス）Osaka Metro 千日前線・今里筋線 今里駅②番出口より千日前通を南西に徒歩約 2 分

【第 1 部 記念講演】

- (1) 伊東 明 教授（大阪公立大学大学院教授）  
「西日本のタンポポ ～身近な植物に起きている変化～」
- (2) 鍋島 靖信 教授（大阪府環境農林水産総合研究所特認研究員）  
「大阪湾の今～海の生物異変」
- (3) 遊磨 正秀 教授（龍谷大学名誉教授）  
「じつは身近なホタル」

【第 2 部 パネルディスカッション】

コーディネーター 渡辺 弘之 学長（京都大学名誉教授）

後援：近畿中国森林管理局／大阪府／滋賀県／大阪市／林野労組近畿  
中国地方本部／読売新聞社／毎日新聞社／連合大阪（予定）



画像：大阪市生涯学習情報提供システム「いちようネット」  
東成区民センター ページより転用

【お申込み・お問い合わせ】NPO 法人自然と緑事務局  
〒540 - 0006 大阪市中央区法円坂 1-1-18 大阪市教育会館 5 階  
TEL:06-6809-1700 FAX :06-6809-2702

E-mail: info-sm@shizen-midori.org



以下を記入し、NPO 法人自然と緑事務局へ FAX またはメールにてお申し込みください。

氏名： \_\_\_\_\_（他 名） 電話番号： \_\_\_\_\_

住所： \_\_\_\_\_

\* 閉会後の懇親会（会費制）に参加 ・ 不参加（どちらかに○印）

\* ご記載いただいた個人情報は、当シンポジウムの開催事務にのみ使用させていただきます。

NPO 法人「自然と緑」が運営する「自然大学」は、1995 年の創立から 30 年を迎えました。この間、気候変動や動植物の絶滅危機など、私たちの取り巻く環境は激変しています。

本シンポジウムでは、長年近畿で自然観察を続けてきた 3 名の専門家を招き、長期調査から見た現状と未来を語り合います。都市部のタンポポやホタルの変遷、大阪湾のイカナゴ激減といった身近な異変の裏で、一体何が起きているのか。貴重な調査結果を直接聴ける絶好の機会です。



コーディネーター

**渡辺 弘之 (自然大学学長)**

1939 年愛媛県生まれ、1966 年京都大学大学院農学研究科林学専攻博士課程修了、農学博士、京都大学教授、農学部付属演習林長、現在名誉教授、日本林学会評議員・関西支部長、日本土壌動物学会会長、関西自然保護機構 (KONC) 理事長、熱帯生態学会評議員、京都園芸倶楽部会長、社叢学会副理事長、国際アグロフォレスト研究センター (WAC・ICRAF) (Nairobi, Kenya) 理事、琉球大学熱帯生物圏研究センター学外協議など歴任。現在まで海外渡航 129 回 (主に東南アジアの森林・林業調査)。【現在】京都府京の森林文化を守り育てる支援事業検討委員会委員長、京都府立植物園協力会評議員、滋賀県生きもの総合調査「その他陸生無脊椎動物」部会長、岡崎嘉平太国際奨学財団評議員  
【著書】森の動物学 (講談社)、ミミズと土 (平凡社)、ミミズ 嫌われもののはたらきもの (東海大学出版社)、熱帯林の保全と非木材林産物 (京都大学学術出版社)、熱帯の森から 森林研究フィールドノート (あつがる出版社)、果物の王様 ドリアンの植物誌 (長崎出版)、神仏の森は消えるのか (ナカニシヤ出版) など多数。

\*\*\*\*\* パネリストプロフィール \*\*\*\*\*

**伊東 明**



(大阪公立大学大学院教授、大阪公立大学理学国際教育研究センター長、日本学術会議連携会員、関西自然保護機構副会長)

1995 年京都大学大学院農学研究科博士課程 (熱帯農学専攻) 単位取得退学、博士 (農)、愛媛大学農学部演習林助手、大阪市立大学理学部教授、日本生態学会誌編集長、日本生態学会近畿地区会長。【著書】(いずれも分担執筆)に「都市・森・人をつなぐ—森の植物園からの提言」「熱帯林研究ノート ビーター・アシュトンと語る熱帯林研究の未来」「Tropical Forest Diversity and Dynamism: Findings from a Large-Scale Network Forest Dynamics Plots (英語)」など。1997 年日本熱帯生態学会「吉良賞」、2008 年関西自然保護機構論文賞「四手井綱英記念賞」など受賞。

**鍋島 靖信**



(大阪市立自然史博物館友の会会長・外来研究員、大阪府立環境農林水産総合研究所特認研究員、大阪海区漁業調整委員会専門委員)

【経歴】1977 年三重大学水産学部増殖学科卒、1977~1989 年大阪府水産試験場、2013 年大阪府立環境農林水産総合研究所退職、2016 年大阪海区漁業調整委員会専門委員【活動】水産試験場で研究の傍ら、大阪市立自然史博物館友の会、自然大学などの海洋生物・環境に関する講師を務め、大阪湾見守りネットなどで環境保全活動に取り組む。海と日本プロジェクト講師、NHK ラジオで大阪湾の魚を 3 年半担当、2023・2024 年 1 月大阪湾に来遊したマッコウクジラについてテレビ各局で解説を行った。【著書】「あなご」とは 身近で不思議なナガモノの生態 (恒星社厚生閣 2025) [共著] 写真でわかる磯の生き物図鑑 (海文堂出版 2023) 共著、大阪湾の自然と再生 (2008 大阪公立大学共同出版会) 他。

(龍谷大学名誉教授、全国ホタル研究会会長)

**遊磨 正秀**

1981 年京都大学大学院理学研究科卒、滋賀県教育委員会琵琶湖博物館準備室、京都大学生態学研究センター助教授、龍谷大学理工学部教授を経て、現在に至る。【著書】じつは身近なホタルのはなし (緑書房)、河川生態学 (講談社サイエンティフィック、共著)、森里川湖のくらしと環境 (晃洋書房、共著)、里山学講義 (晃洋書房、共著)、湿地の大研究-役割から保全の取り組みまで (PHP、監修)、里山学のまなざし (昭和堂、共著)、里山学のすすめ (昭和堂、共著)、トンボと自然観 (京大出版会、共著)、生物多様性科学のすすめ (丸善、共著)、みんなでホタルダス: 琵琶湖地域のホタルと身近な水環境調査 (新曜社、共著)、水辺遊びの生態学-琵琶湖地域の三世代の語りから (農文協、共著) など。

